

浄土真宗と白川村

浄土真宗は、日本で最も広く信仰されている仏教の一派である。創始者の親鸞（1173-1263）は、悟りを得るために必要とされる苦しい修行や複雑な教えに幻滅した。彼は、阿弥陀仏を信じることで、阿弥陀仏を拝む者を死後、極楽（浄土）に導いてくれると説いた。

白川の浄土真宗信者は、親鸞の弟子の一人である嘉念坊善俊という僧侶が、師の命を受けて阿弥陀仏と浄土の言葉を広く伝える巡回布教をしていたと信じている。13 世紀に飛騨国（現在の岐阜県北部）の中でも僻遠で人口の少ない白川にたどり着いた善俊は、庄川の鳩谷村を拠点にして親鸞の教えを広めることにした。

善俊の努力は実を結び、浄土真宗はやがて白川の仏教の主流となっていった。食文化や建築物、埋葬方法など、地域の生活や文化に大きな影響を与え、現在も地域の信仰の基盤となっている。

浄土真宗の信者にとって最も重要な祝日は、毎年 11 月から 12 月にかけて行われる報恩講で、親鸞を追悼するとともに、家族が集まって一年の感謝を捧げる場でもある。報恩講の食事は、仏教の戒律に則った精進料理で、豆腐や野菜を中心に、お茶や果物・木の実を使ったお菓子が出される。豆腐料理は今でも地元の名物であり、庄川流域に点在する古い果樹は、昔、家庭の庭で保存食としての果物を育てていたことを思い起こさせる。

報恩講は通常、家で行われ、村の僧侶が家々を回って儀式を行う。報恩講の法話を家族全員が聞ける十分な広さのスペースが必要だったため、白川地域のほとんどの合掌造りの家には、仏壇がある大きな畳の部屋がある。その仏壇の前に僧侶は話したり、祈ったりしていた。

また、白川の伝統的な埋葬方法は、浄土真宗、特に初期の親鸞や嘉念坊善俊の教えが強く反映されている。古くから日本では、死者を供養するために墓を整備することが宗教生活の中心となっていたが、親鸞は、先祖を崇拜し、やがてあの世に行けるためにその遺骨の入った墓で儀式を行うことは不要であるとした。阿弥陀仏が死後すぐに救済してくれるのだから、墓や骨壺は必要ない。白川ではこの考えが広く浸透しており、目立った墓を作らず、遺骨の一部だけを埋め、その上に石を積むという方法がとられた。その代表的な例が鳩谷にある嘉念坊善俊の墓である。